

## 修学月旅行

金井中学校 一年

金澤かなざわ  
凜空りく

帰りの会で先生が言った。

「修学旅行は月に行きます。」

え…？ 僕の頭には「？」しか浮かんでこなかった。

「どうだ、今っぽくていいだろう。」

先生はそう言ったが、冗談としか思えなかった。僕たちの学年は三十人しかない。それでも全員で月へ行くなんて。他のみんなも冗談としか思っていないようだった。

それから一週間が経ち、いよいよ修学旅行当日になった。

「はい、それではみなさん、トイレを済ませたら、順番にロケットに乗りましょう。」

先生が指差した方向を見ると、本当にロケットがあつた。観光バスくらいの大きさだった。おそろおそる中に入ると、ぎゅうぎゅうに座席が並んでいて、頑丈そうなシートベルトが付いていた。座席の後ろのスペースには宇宙服がずらりと壁にかかっていた。本当だったんだ…。シートベルトをしめながら、僕は不安やわくわく、いろんな気持ちが湧き出てきた。

「それでは発射します。」

先生ののんきな声と共に、大きな地響きを立ててロケットが発射した。その後のことは衝撃がすごすぎて残念ながら覚えていない。どのくらい時間が経ったのだろう。先生の声でふっと目が覚めた。

「そろそろ月に到着します。シートベルトはそのままお待ちください。」

窓の外を見ると、映画で見たことのあるような景色が広がっていて、ロケットの中が歓声に包まれた。すごいぞ！

着陸の衝撃もすごかったけど、今度は気絶せずに済んだ。先生の指示を聞きながら、みんな宇宙服を着込んだ。本当の宇宙飛行士になった気分だ。みんなスマホで写真を撮り合ったりしてはしゃいでいる。

そしていよいよロケットの外に踏み出した。なんだか体がふわふわする。少し跳んだだけで体が高く浮き上がって、まるでゲームの世界に入り込んだみたい。

「みんな楽しんでるね。それでは、この観察シートに気付いたことを書き込んでいってね。写真を撮ってもいいですよ。」

審査員賞  
金澤凜空「修学月旅行」

いつも使っているおなじみの観察シートだけど、場所が違うだけでとても新鮮に感じる。僕もみんなも真剣に観察を続けた。月の表面は灰色で地球みたいな色がない。草木も生えていないから石ころだらけの砂漠みたいだ。色のせいかな、とてもひっそりとした感じがする。そんなことをまとめているうちに地球に帰る時間になってしまった。

なごりおしさもあるけれど、地球に帰れるという安心感でいっぱいになり、みんなで楽しくおしゃべりしながらロケットに乗り込んだ。宇宙服を脱いで座席に座り、シートベルトをしっかりとしめて発射を待った。あれ？ なかなか発射しないな。みんながざわざわし始めた時、先生が申し訳なさそうにこちらを見て言った。

「みんなごめん：先生、月に着いて嬉しくなっちゃって、ロケットのエンジン切り忘れてたみたいで：ガス欠です：ロケットが動かないんです：。」

「ええー！」

ロケットの中に大絶叫が響き渡った。大ブーイングだ。泣いている子もいる。僕だって泣きたい。

「みんなでどうやったら帰れるか考えましょう。」

半泣きの先生が深々と頭を下げたところでパチツと目が覚めた。急いで周りを見渡す。僕のふとん、僕の部屋。夢で良かった：。安心して大きなため息をついた僕を子猫のミイが心配そうに見上げている。僕はミイをだっこしてなでた。やつぱり地球が一番だ。いつもの朝食を食べて登校する。いつもどおりの学校で授業を受けた。

帰りの会で先生が言った。

「修学旅行は月に行きます。」

審査員講評 \*\*\*\*\*

描写が素晴らしく、本当にいま自分も月に行っているかのように錯覚しました。ぼく自身、宇宙へ修学旅行や遠足に行く作品を書いてきましたが、月で観察シートを書く場面など、自分には絶対に書けないなと唸りました。ラストのループ構造もいいですね。月への旅行が現実味を帯びてきた昨今、いつか本当にこんなことが実現したらと夢が膨らみました。